工業高等専門学校学生の意識調査

東京工業大学　事務局長　斉　藤　寛治郎

本調査は高等専門学校学生を対象にして、学生の生活態度、生活意識を把握するために行なわれたものである。

この調査は

福島工業高等専門学校長の佐藤先生を主任研究者とした若い青年心理学研究者の協同研究として文部省科学研究費の補助を得て行なわれた。結果の処理については社団法人新情報センターの協力を得て各種の集計分析を行った。調査の内容および処理データーは大部のものであるので、ここにはその一部について他の関連資料と比較しながら紹介することとした。

1. 調査の目的

戦後の教育改革による新制度としていわゆる6、3、4制が実施された。高等専門学校制度は昭和36年に新しい制度として創設され、いわゆる6、3、5制が並列制度として実施された。高等専門学校創設の原動力は何といっても技術科学の急速な進歩発展に伴う技術者の必要にあったといえる。そのため高等専門学校は工業に関する学科のみに限定された。新しい高等教育機関の特長は中学卒業後5年間の一貫教育にあり、実践的な技術の学習を重視したことである。また学年制の採用や学寮の充実などもあげられる。

この新しい構想で出発した高等専門学校制度も創設以来13年目を迎へ、現在国公私立65校に発展した。

高等専門学校制度に対する一般的評価としては一つはこの学校が創設当時は時代の花形として30ないし40倍の志願者を集めて出発したこと、またこの学校が4ないし5学科の小規模学校で、かつ都会の中心から離れた静かな環境にあることから理想的な教育が行なわれているとみるもの、他方高等教育機関の拡充等により、志願者が2ないし5倍程度に漸減していることなどから、あたかも高等専門学校の社会的役割が終ったかのようにみるものなど、これらを両極としていろいろな見方がある。

いずれにしても、この制度が新設された当時と現在とでは、社会・経済情勢が変って来ていることは事実であり、これらの社会変化に即応すべく関係者の努力が重ねられつつ現在に到っていることも事実である。そのため、この制度に関して現在いくつかの批判や提案がなされており、各種の調査研究も行なわれている。

この調査は

この制度を自ら体験している学生側からのものであり、この種のものとしては初めてのものである。この試みは高専制度に対する受け止め方や、社会変化に対する受け止め方などを調査し、制度改善の基礎資料を得ようとしたものである。

2. 調査項目

この調査はその目的から三つの側面より学生の意識を把握しようとした。

(1) 対人関係の側面、つまり、親、兄弟、教師、友人、先輩といった具体的な場面を通じて学生がいかに適応しているか。

(2) 生活感情の側面、つまり、具体的には毎日の生活をどんな態度で、またどんな感じで受け止めているか、また将来に対する見通し、希望、期待といった面ではどうか。

(3) 学校生活の側面、つまり、高専生として、授業、課外活動、学寮、アルバイトなどを通じてどのような適応、不適応の状態にあるか。

これらの三つの側面から質問が設けられ、全体で97問となった。調査方法は集団調査であり、その結果はすべてコンピューターで処理できるように設計された。

3. 標　　本

高等専門学校は国立54校、公立4校、私立7校があり、国立54校ではその内に工業関係46校、電波関係3校、商船関係5校となっている。本調査は国立の工業関係46校851学級のうち18高等専門学校の100学級を無作為に抽出した。標本の抽出は、地域、学科、学級を指標として行なった。標本総数は3,183名で、母集団に対する比率は約12％である。

4. 調査の概要

(1) 対人関係について

『あなたは、現在学内の友人関係に満足していますか』の問に対して、「非常に満足している」「かなり満足している」合わせて30.7％、「どちらともいえない」40.5％、「あまり満足していない」「全く満足していない」合わせて28.4％となっている。なお積極的に「全く満足していない」としたものは4.6％にとどまっており、友人関係の適応は一般的にみてよいと思われる。

（註）集計の上では「その他」「不明」「わからない」の回答数があるが、これらの数値が多い場合は表示するとして、少ない場合にはそれらの数字を除いた数をパーセントに示して記述してある。（以下同じ）

『現在の学内または学外の友人とのつき合いで、話題は主として次のどれに当てはまりますか』の問の結果は表1（2つの設問結果を1つの表にまとめたもの）のとおりである。

（表1）　学内、学外での友人の話題

	就職	進学	学科の専門と勉強や	趣味や遊び	異性	社会・人生・思想	その他
	%	%	%	%	%	%	%
学内	4.1	1.4	6.7	49.9	19.4	11.0	9.3
学外	3.1	4.5	5.8	49.3	11.3	11.3	9.5

「趣味や遊び」については学内、学外を問わず一般的に共通の話題が多いようである。学内、学外における話題で大きく異なっているのは「進学」と「異性」への反応である。高専生には化学科関係に若干の女性がいるのみであり、ほとんど男子学生のみであるが、学外の友人には異性が多いことなどから学内では異性の話題が多くなるのは当然と思われる。進学については中学時代の同級生や友人に高校生が多いことから、進学への話題も多く関心も高くなっていることを示していると思われる。

『就職後、職場の先輩や上司とうまくやっていけるという自信がありますか』の問に対して「はい」と答えたものは62.6％であり、自信のほどがうかがわれる。『これからの人生で、自分の両親とうまくやっていける自信がありますか』の問に対して「いいえ」と否定的な反応を示したものはわずかに9.9％、また『就職はどんなところに決めたいですか』の問に対して「なるべく親もとから離れたところ」と積極的に答えたものは17.2％となっており、現代若ものの風潮などからみれば高専生はむしろ保守的傾向にあるとさえいえるように思われる。

(2) 生活感情について

『あなたは自分自身をふりかえって次のどれにあてはまりますか』の問に対して、「何ごとにも夢中になる方だ」という回答をしたものが60.3%を占めており、「何事にも夢中になれない方だ」という消極的反応は4.6%と極めて少ない。高専生には技術者として昔からいわれていた「夢中型」性格のものが多いといえよう。つまり高専生には一般的にみて技術者としての適格者が多いように思う。しかし、これからの技術者は集団の中で協同で作業する場合の多いことが考えられるので、今後はその方面の指導も必要となるであろう。

『「自分の人生は結局むなしいものだ」とか「生きていてもどうにもならない」など感じたことがあるか』の問に対する回答は表2のとおりである。

（表2） 人生に対する「むなしさ」の感じ方

	あった	ない	どちらともいえない
高専生	66.3%	22.4%	11.1%
大学生	55.8	34.4	9.8

人生に対する否定の感じ方は感情的に不安定な青年期の特長として示されたものである。とくに社会の変化に適応できないと感じた時に感じられるものだとされている。このような体験が高い反応で示されるのはむしろ正常なのかも知れないが教育的配慮の必要な重要な一面でもあろう。

（註）大学生の欄に示した数値は文部省が全国の国公私立大学4,000人を対象に面接調査を行なった結果を示すものである。以下大学生の欄には同調査の資料を引用した。

『あなたは、できればどんな人生を送りたいと思いますか』の問に対して、「波乱万丈の人生」13.1%（10.3）「冒険的な人生」11.2%（20.4）「放浪的人生」9.9%（3.0）「マイホーム的人生」35.8%（16.7）「もうれつ人生」12.9%（19.3）となっている。パーセントのあとに示してある（ ）内の数字は『あなたは自分の子どもが男の子だと、どんな人生を送って欲しいと思いますか』という他の設問のパーセントを示すものである。概して高専生のエネルギーの内蔵を示しているように思われる。なお、「マイホーム型」をあげるものは35%であるが、自分の子にたいしては16%にとどまっている点は興味深い。

『あなたは、将来の目標として、つぎのうちからどれを選びますか』の問に対する結果は表3の通りである。

（表3） 将来の目標

項目	高専生	大学生
	%	%
まじめに自分なりに努力する	23.1	26.7
生活を楽しむ	21.8	19.4
明るい家庭を作る	10.2	9.3
教養の豊かな家庭を作る	2.7	8.0
個人として立派な人間になる	16.2	15.5
出世する	2.3	1.1
有名になる	0.9	0.4
金持ちになる	2.7	1.7
仕事に打ちこむ	4.8	6.2
専門分野で一流になる	9.2	8.9
世のため人のために尽す	2.9	2.1
この中にない	2.1	4.4

将来の目標としてあげた選択肢ごとの反応について高専生、大学生を比較すればほとんど同じ反応傾向を示しているといえる。現代青年の風潮を背景にもちながらも教養ある青年に共通に見られる傾向が高専生にも確認できたといえよう。

『人間の生活にはいろいろの領域がありますがあなたにとって一番大切なものはどれですか』の問に対する回答は表4のとおりである。

この設問に対する回答も前問の回答と同様大学生とほとんど同じ傾向といえるし、教養ある青年の共通性を見出すことができよう。

（表4） 将来の目標

項目	高専生	大学生
	%	%
一個人としての生活	31.4	35.8
家庭人としての生活	7.2	7.4
学生（職業人）としての生活	11.4	9.4
町や村の住民としての生活	0.7	0.5
国家の一員としての生活	2.8	2.6
人類の一員としての生活	9.6	10.9
すべての生活がたいせつ	23.2	24.8
とくに大切なものがない	1.2	4.9
わからない	9.2	3.8

とくに「わからない」という回答に若干差が見られるが、年令的な差から明確な回答を出しにくい者が若干多くなっているのはやむを得ないことといえよう。

『最近の社会のできごとについて、あなたの考え方にいちばん強い影響を与えたと思われるのはどれですか』の問に対する回答は表5のとおりである。

（表5） 社会の出来ごとに対して影響を与えたもの

項目	高専生	大学生	青少年
	%	%	%
ラジオ、テレビの内容	11.4	10.9	36.9
新聞、雑誌の内容	20.8	24.4	19.7
単行本の内容	17.0	13.3	3.9
先生の意見	6.8	3.4	5.0
先輩の意見	4.1	5.8	6.6
友人の意見	10.3	18.3	11.8
親、兄弟の意見	6.9	3.4	4.3
組織や団体の意見	2.0	3.3	2.2
社会人、学者の意見	3.4	5.0	1.4
その他	6.0	5.5	} 7.9
わからない	9.7	6.6	

（註）青少年の欄に示す数字は総理府青少年局で15才から24才の青少年125,487名を対象に調査した結果である。

全体的には現代の「若もの」としての特長を発見することが出来る。内容的には「テレビ、ラジオ」「単行本」「社会人、学者」からの影響という点では高専生と大学生が同じ傾向を示し、教養人としての特長を見出すことができよう。また、組織や団体の意見に影響される比率はそれぞれ2ないし3%あることがわかる。高専生として他に比べてやや高い%を示しているものに「先生の意見」、「親、兄弟の意見」が見出せるがこれらも高専生の特長の一つといえよう。

(3) 学校生活について

『あなたは、学校の授業をどうしたらさらによくなると思いますか』の問に対して、「授業時間数をもっと少なくして、がっちりやってもらいたい」16.1%「自分の好きな授業を選択できるようにしてほしい」35.1%とこれらに回答が集中している。いずれも工学関係の学科に見出せる要求であるが、高専の改善案を検討する場合に参考になる回答のように思われる。

『あなたは、もっと深く学びたいと思うものがありますか』の問に対して、「はい」と回答したものは高専生77.7%、大学生は78.4%と高専生も大学生と同様高い学習意欲のあることが確認される。『あなたは先生と授業以外でも接触していますか』の問に対して、「全く接触していない」と回答したものは高専生37.6%、大学生38.6%とほぼ同数を示している。大学生の場合は学生数も多いのでやむを得ないようにも思われるが、高専の場合は高すぎる。今後の学生指導上学生との接触に特段のくふうを期待したい。

『あなたは学校生活についてどのように感じていますか』の問に対する回答は表6のとおりである。

積極的に「不満」を訴えている欄を見ても高専生のそれは高いパーセントを示しているといえる

（表６）　学校生活についての満足感

区　分	高専生	大学生	東大生（１年生）	日本の大学生	アメリカの大学生	フランスの大学生
非常に満足	1.7％	4.4％	21.0％	17.2％	42.7％	38.0％
まあまあ満足	18.4	48.8	43.0	37.5	37.5	31.4
やや不満	28.5	20.5	23.0	27.7	12.4	17.1
不満	27.3	18.1	12.0	17.5	7.1	11.9
いちがいにいえない	19.8	11.0	—	—	—	—
わからない	3.3	2.4	—	—	0.3	1.6

日本の場合は全体的に学校生活に対して「不満」とするものが多く、東京大学の場合でも、世界の資料から最も不満度の高いフランスよりもやや高い。学校生活に不満であるという総括的な反応からは詳細なことはわからないが、これらに対し分析検討を加え、制度として改善すべさは正し、正しい指導の必要なものにはこれに努力すべきであろう。

（註）日本の大学生、アメリカの大学生、フランスの大学生の欄は総理府青少年対策本部で行なった世界青年意識調査から引用したものである。

『あなたはクラブ活動に参加してますか』の問に対して「参加している」と回答したもの６０.５％、大学生４５.５％となっており、高専ではクラブ活動が活潑に行なわれている。

おわりに

以上、高専生の意識調査の一部を、他の資料を参考にしながら、若干の考察を加えて述べたが、ここに述べた範囲のみでまとめることはできないが、調査全体のまとめとして掲げればおおよそ次のようになろう。

(1) 高専学生の学習意欲は大学生のそれに劣らない強いものが見られる。また将来に対しても希望と期待と自信をもって生活しているといえよう。

(2) 高専学生も現代「若もの」の意識に共通しているものをもっている。とくに社会への関心は大学生のそれと同様高く、しかも、社会の変化を敏感に反映しているように思われる。

(3) 高専学生として「不満」とされる内容については今後検討し制度改善のための適切な資料を得る努力を重ねる必要があろう。

本稿で述べたものは紙数の関係で調査の一部の紹介に止めざるを得なかったが、この種の基礎資料の積み上げが今後の高等専門学校の発展に欠かせないものとなるであろう。

編集後記

私どもが登山をすると、頂上につくまでに全精力を使い果してしまい、下山は疲労困ぱいその極に達し……という結果となる場合が多い。本格的な登山には、１０の体力のうち登りに４だけ体力を使い、６のスタミナを下山にとっておくことが大切といわれている。

調査も同様で、むしろ大切なのは登山よりも下山、つまり調査が終ってからの利用の問題であろう。この小冊子は「調査結果をどのように解釈し、活用しているか」という観点からの特集であり、自治体などの行政マンからの貴重な玉稿集である。　（橋本）